

防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

9

2016

No.538



特集

- ◆ マンション改修と防水技術
- ◆ 公共施設での採用が進むNETIS技術

形骸化したKY活動

鈴木 哲夫

KYとは、「危険予知」のことで、「KYT」と「KYK」がある。「KYT」は、「危険予知訓練」のことであり、危険を想定して事前に検討する訓練作業である。「KYK」は、現場の作業開始前に現実に起こり得る作業の事故防止等の回避に役立てるための直前確認のことである。

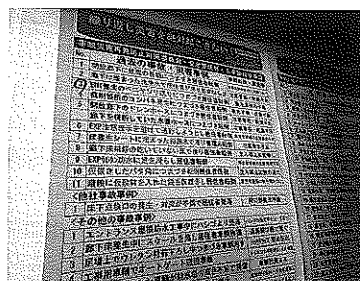


写真1 よく見かけるKYの注意喚起掲示物

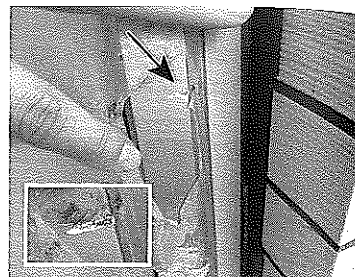


写真2 ディスクサンダーの刃が当たったアルミサッシの傷

工事現場では、現場作業員詰所に日常的な注意喚起のため、写真1のような掲示物を見かけるが、どういうわけか現場の事故はよく起こる。そのほとんどは、不注意に属するもので、危機意識に対する作業員の気配り不足から発生しやすい。

写真2は、改修工事のため直してタイルの欠けを張り替えるため、サンダーカットしようとしたところ、誤ってサンダーの刃がアルミサッシ枠に触れてしまい傷つけてしまった例である。足場は数日後に解体することになっていた。カットする場所は、窓の抱き部分のタイルであり、アルミサッシまでの距離は65mm程度で、サッシ枠の一部が出ており、写真3のようにダイヤモンドカッターで切り込むときにタイル面に注意が集中し、写真4の矢印位置のサッシ側に刃が当たるといった意識が及んでいなかったのである。



写真3 サッシ抱きのサンダーカットは傷つけ事故が多い

それだけではない。危険予知の観点では、刃物を使うときには、サッシ側の養生を怠ったことが事故回避につながらなかったものであり、ちょっとした横着さが引き起こした失敗である。

現場でのKYK活動の日報を見せてもらったことがあるが、ほとんどが書面の作成内容が形骸化しており、形式的な記載が目についた。小さなヒヤリを想定し、見過ごせない配慮や具体的な対応方法について十分な記載がない。つまり、あまり考えていないということか。

この事例の現場でも、KY日報は常時提出されていたのだが、ケアレスミスに起因した小さな事故がいくつか発生し、そのためにかかる処理費用は当然に想定外の支出となった。この事例の場合、わずか2cmほどの傷をつけたことにより、サッシ枠の交換をせざるを得なくなった。しかも、部屋を通して作業してもらえない感情的な事情もあり、仮設足場も準備しなければならなくなったのである。養生費1000円程度が約100万円に膨れ上がった苦い失敗と言えよう。

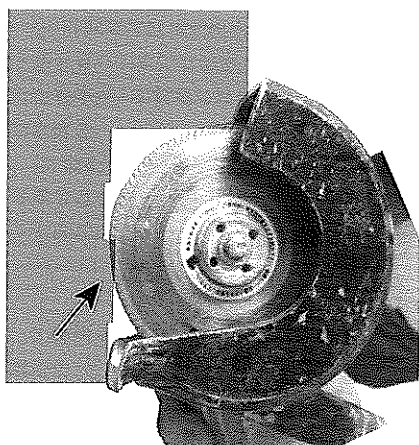


写真4 サッシにダイヤモンドカッターの刃が当たりやすい部位(矢印)

(尙)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役